説教20220320出エジプト17：1-7　ヨハネ4：5-42「湧き出づる水」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

井戸という場所は、命の水が湧き出る神聖な場であると同時に、荒れ野で一息つける、安らぎと癒しの場でもありました。現代の荒れ野でも、をめぐればオアシスという看板を掲げた飲み屋さんがあるように、井戸という場所は、疲れた人たちがそこに集まってしばし語り合い親睦を深め、又井戸端会議という言葉もあるように、時には噂話をしたりして憂さ晴らしをする場でもあったのでしょう。

この時代には、普通、井戸の水を汲んで家まで運んでくるのは女性の仕事とされていました。それで女性たちは涼しくなってきた夕刻に井戸まで出かけて行って、井戸で同じようにやって来た女性たちと出会って、そこでみんなで語り合う時を持ったのでした。このように黙想していきますと、なんだかそれは今でいう女子会という名の飲み会に通じる面があるように思われてきます。女性たちは家から解放された場所で、気兼ねなく言いたいことを言い合って、その飲み会での会話を楽しんだことでしょう。実際、井戸では、そこから水をくみ上げて水をためるついでに、一口その水を飲んで味わっていたのではないでしょうか。将に井戸という場は、飲んで語ってという飲み屋さんのようなところでもあったのです。

そんな井戸という場所に、イエス様は疲れた姿でやってこられて、井戸のそばに座り込んでしまわれました。イエス様は疲れていました、それはなぜでしょうか、イエス様は全能の神様でもありますから、力がとめどなく内から湧きる強い方なのではないでしょうか。しかし、ここでは、イエス様は敢えて疲れて、弱い者になられました。それは「弱い人に対しては弱い人の様になりました、ユダヤ人に対してはユダヤ人の様になりました」と聖書に書いてある通りのことを、イエス様はサマリアの女に対して実行されたのです。

サマリアの女は、実名は出て来ませんが、サマリアの女というだけで、ユダヤ人とは仲が悪くて憎しみあっている存在だ、というように規定されてしまいます。サマリアの女がユダヤ人と話をするなどとはもっての他、というわけです。実際、この場に弟子たちがいれば、「サマリアの女よ、話しかけるな」などと言って、イエス様との仲を裂こうとしたかもしれません。しかし幸いなことに、弟子たちは出払っていました。つまり、サマリアの女とイエス様は、このヤコブの井戸で、二人きりで語り合える飲み会の席に着かされたという事です。サマリアの女がこのような幸いの場に招かれることが出来たのには理由がありまして、その理由というのは、このサマリアの女が街の人たちから嫌われていて、つまはじきにされていたということです。街の女性たちは、この井戸で同じようにやって来た女性たちと出会って、そこでみんなで語り合う時を持ったのでしたが、それは涼しくなった夕刻のことでした。このサマリアの女は、他の女性たちと顔を合わせたくなかったので、いつも暑い日中のさなかにこの井戸に来て、一人で水を汲んでそれをカメに入れて街の家まで運ぶという仕事をしていたのでした。

このサマリアの女はどんな女性だったのでしょうか。かつて５人の夫がいて、今は、内縁の夫か情夫かわかりませんけれども、そんな男と同棲している、というのがこの女性のありのままの姿であります。彼女は感情の起伏が激しく、男に逢えば、その男にすがりつき救いを求め、結局、捨てられるという事を５回も繰り返してその人生を歩んできたのです。その彼女の姿を外から見れば、ふしだらで、みだらな女という風に見られるのが普通だったでしょう。しかし、彼女の内面はそうではありませんでした。彼女は、男に救いを求めても救いは得られず、結局捨てられて深く傷つき、それでも尚同じことを繰り返し続けました。彼女の心はボロボロで、孤独であり、愛情に飢え渇き、益々、執着という愛欲にまみれていたのではないかと思います。サマリアの女は、人生に疲れて弱くされた人でした。

今日、イエス様はそんなサマリアの女の前に、疲れた一人の男として姿を現したのでした。少なくとも、この女にはイエス様はそのように見えたことでしょう。ある注解書によりますと、今日の聖書箇所に記されたイエス様とサマリアの女との会話は、そのあらすじだけを簡潔に記したもので、実際にはこの二人はまさに飲み会での会話の様に、数多くの会話のやり取りをしたのだ、という事です。確かに、この井戸端で、二人の会話が盛り上がり、深まっていけば、そこでは多くの言葉が投げ交わされるでしょうし、仮に２時間会話したとしたら、その会話の逐一を聖書におさめることは出来なかったでしょう。実際、この二人の会話は、盛り上がり深まりました。そうして、最後には、この女性は、水ガメをほったらかして、町へと行って、町の人々に「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」と言いふらしたわけですから、彼女はイエス様との会話によって、心がときめき、我も忘れて、みんなにこの人との出会いを言いふらしたくなったのであります。街の人々から嫌われ後ろ指を指されていたような彼女が、イエス様の言葉一つ一つによって変えられたのです。将に、湧き出づる永遠の命に至る水とは、イエス様の御言葉の一つ一つのことであります。

ではサマリアの女とイエス様との会話を見ていきましょう。イエス様は水を汲みに来たサマリアの女を見るや、開口一番「水を飲ませてください」と声を掛けるのです。今日のイエス様は多分に人間的です。まるで飲み屋さんに入るや否や「水を飲ませてください」とせがむお客の様でもあります。しかし、このイエス様の声掛けは、サマリアの女に対する試みでありました。イエス様は、彼女こそ色々な男たちに「水を飲ませてください」と憐れみを求め続けてきた女であることを見抜かれました。だから、反対に自分から求めてみれば、彼女がどう出るのかを試したのであります。すると彼女は「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」という予想通りの返答を致します。それでイエス様はやっと本当に彼女に言いたかったことを言うのです。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」つまりイエス様は、彼女のほうから『水を飲ませてください』と頼んでくれることを待っておられたのです。でも彼女ははぐらかしてきます。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。」そうして、この井戸を造ったとされるヤコブの話をします。そして自分たちはヤコブの子孫であるという事を話します。。それで又イエス様は言われます。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」この言葉は、今の私たちが覚えているような、典型的な御言葉でありますが、彼女は、この言葉をまともに受け取ってはいません。彼女は、この御言葉の意味が分からず、多少皮肉も込めつつ次のように返答します。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」つまり彼女は「そんなことを言ってる暇があったら、実際に私にそんな水を用意して、井戸まで汲みに来る仕事からも解放して下さいよ」という具合に言葉をしているのです。しかしこんな会話の成り行きのうちにイエス様の試みは成功しています。とにもかくにも彼女に「その水をください。」と言わしめたのですから。

それからイエス様は唐突に「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と彼女に言います。夫のことを彼女は触れてほしくなかったのかも知れません、彼女は答えます。「わたしには夫はいません」この答えには、出来れば夫のことは隠しておきたいという心境が見え隠れします。夫のことは触れないままにイエス様との会話を続けたいという思いがあります。しかし、イエス様には隠し事は出来ません。イエス様は言います。「『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」このイエス様の発言は、彼女の身の上を暴くとともに、自分が何もかも知っているということを彼女に知らしめたのです。彼女は驚いて、ここに至ってやっとこの男がただモノではないこと悟り、「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。」と言ってみせるのです。でも、まだ彼女は街に走り出すほどには心がときめいてはいません。この後、二人の会話は、ユダヤ人とサマリア人という不幸にも分かたれてしまった民族が、まことに礼拝する場所はどこにあるのか、という話に及びます。そしてイエス様は言います。「しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」このことがイエス様が彼女に本当に伝えたかったことですが、この時の彼女がどれくらいこの御言葉を理解したかは分かりません。。

このヤコブの井戸での二人の会話の終局で交わされた言葉は「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」という御言葉でした。。

そして間違いなく彼女の心に突き刺さったことは、「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」という彼女の言葉が証ししています。彼女がこの時、一番感銘を受けたのは、典型的な御言葉によってではなくて、イエス様という一人の男が、はじめて自分のことを全部、それも深く知ってくれて、私のことを理解してくれて、私を人生の孤独から救い出して下さったメシア（救い主）だったという事でした。。彼女はこの時人々に「この方がメシアかもしれません。」と言って断言することを避けていますが、この言い回しは、イエス様は私には間違いなく救い主であるけれども、ひょっとしたらあなた方にとっても救い主かも知れませんよという意味合いでありましょう。この言い回しがかえって全ての人の救い主であるイエス様のことを言い広める際には、信ぴょう性を持たせています。事実、それからイエス様の言葉を直接聞いた人々は「わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです。」と、その信仰が自分に根付いたことを証言しています。

湧き出づる永遠の命に至る水はこの様に口づてで伝えられ、その水を私たちは共に喜ぶのです。御言葉の種をまく人そしてそれを刈り取る人は、最後の日には間違いなくイエス様の御前に集められその御言葉を、共に永遠に味わい楽しむ者とされるでしょう。

お祈りいたします

全能で憐み深い父なる神よ、

あなたは今日も又わたしたちを教会という御言葉の泉に集めて下さいました。どうか私たちが永遠の命に至る水を、値なく飲むことが出来るように聖霊で満たして下さい。

御言葉の種をまき続けることが、長く苦しく空しい営みの様に感じられ、時に私たちは涙を流しながらこの世を歩まされますが、どうか御言葉の通り、御子キリストが来られる時には、種まく者も刈り取る者も区別なく、共にあなたにあって喜び祝う者としてくださいます様に。

先週はこの教会でも総会が行われ新たな長老の方々も選び出されました。この様にこの地で具体的な歴史的歩みを記していく教会の一歩一歩をあなたの力強い御手で守り導いて下さい。

この地で行われている多くの紛争を覚えます。わたしたちをどうか平和を作りだす器として豊かに用いて下さい。私たちに永遠の命の水を補給し、倦み疲れることなくその技を行わしめてください。

天にある教会で休息に入る時、御言葉が絶えず湧き出づる泉のほとりで共に安らうことが出来ますように。

父と聖霊とともに